

# 「私と国際頭痛学会」



医療法人社団健育会 湘南慶育病院  
副院長・脳神経センター長  
寺山靖夫

私が片頭痛研究に深く関わるようになったきっかけは、妻の片頭痛でした。脳循環代謝に魅せられ、1983年に慶應義塾大学医学部神経内科に入局しました。当時は、脳卒中患者の脳循環評価がVan Slyke法からXenon CT法へと進化しつつある時代。そんな中、米国テキサス州ヒューストンのベイラー医科大学のJohn Stirling Meyer教授の下でHarold Wolff賞を二度も受賞して帰国された坂井文彦先生のご指導を受ける幸運に恵まれました。1990年1月、念願叶って私自身もMeyer教授の研究室に留学することになりました。ヒューストンに到着して間もなく、引っ越しも済まぬホテル暮らしの中、同期であった故・川村潤先生ご夫妻とともに出かけたのが、フロリダ州オーランドで開催された脳循環代謝学会の合同会議(15th International Joint Conference on Stroke and Cerebral Circulation February 15–17, 1990)でした。この頃の片頭痛研究は大きな転換期にあり、脳循環仮説をめぐって議論が白熱していました。Jes Olesen先生が、閃輝暗点における脳血流動態の観察から脳血管説に異議を唱え始め、脳循環代謝学会がその論争の最前線となっていました。今振り返れば、まさにそのときその場所が、Moskowitz先生による三叉神経説へのパラダイムシフトの幕開けだったと実感します。Lassen, Ingvar, Moskowitz先生といった世界のレジェンドたちと直接会話を交わせたことは、研究者としての自分にとってかけがえのない瞬間でした。さらに私は、会期中に開かれた「国際頭痛分類第2版」の編集会議にも、Meyer教授とともに参加することになり、緊張しながらも大きな刺激を受けました。一方、妻と2歳の長女にとっては、ディズニーワールドでの4日間が夢のような体験だったようです。その年の秋には、コペンハーゲンで開催された、現在の国際頭痛学会の礎となる1st International Headache Research Seminar(Nov. 23-25, 1990)に参加する機会を得て再び世界のレジェンドたちと再会することができました。

彼らから共通して伝えられた言葉があります。“Travel broadens the mind.”、“You learn more from people than from books.”、

そして、“All true scientific research in medicine stems from the bedside.”。これらの言葉は、今も私の研究の礎となっています。この年の2つの国際学会で得た経験は、私にとってまさに“セレンディピティ”でした。人生の中で偶然にして必然とも思える出会いと体験が、今日の私の原点になっています。

